

JAMの主張

田中ひさやを国会へ送るため もう一声の声掛け運動を

JAM第20回定期大会あいさつ（抜粋） JAM会長 安河内賢弘

機関紙JAM 2018年8月25日発行 第235号

西日本及び中部地区を中心とした豪雨災害におきまして亡くなられた皆様に心から哀悼の意を表しますと共に、被災地の一日も早い復旧・復興を心より祈念申し上げます。組合員の皆様には、募金活動あるいはボランティア活動にも積極的にご参加を頂いており、感謝申し上げます。JAMと致しましても引き続き息の長い支援を続けてまいりたいと考えております。

2018年春闘

今次春闘は、好調に推移する受注状況と歴史的な人手不足を背景に、とりわけ中小企業が粘り強く交渉を継続した結果、全体で1,612円の賃金改善を獲得し、100人未満の中小労組では、惜しくも1,700円には届きませんでした。1,698円の賃金改善となり、昨年に引き続き、中小労組が大手労組を上回る改善額を獲得しました。この結果は、それぞれの単組が、JAM方針に従い、自らの賃金実態を詳細に分析し、世の中との格差と職場組合員の声を明確に示しながら会社と粘り強く交渉した成果です。そして、この一連の取り組みこそが個別賃金要求の神髄であり、経団連の主張する支払い能力主義に対するアンチテーゼです。JAMの個別賃金の取り組みは、未だ道半ばと言えます。ここで立ち止まることはできません。

「価値を認めあう社会へ」

JAMは、企業規模、性別あるいはSOGI、国籍、雇用形態、障害の有無に関わらず、そこで働くすべての労働者の、労働の価値、守るべき家族の価値、健康で文化的な生活の価値は変わらないのだという信念の下、公正・公平な取引慣行の確立を目指しながら、2019春闘の取り組みを前進させてまいりたいと思います。

総対話アクション

本年度は初めての取り組みとして、全国に百五ある地協役員の皆様との「総対話アクション」を実施いたしました。突然の活動で、いろいろとご迷惑をお掛けいたしました。様々な忌憚のないご意見を聞くことができました。それぞれの地協役員の皆様は、非常に献身的に貴重な自らの時間、業務の時間を割きながらJAM運動を推進していただいていることに、改めて感謝を申し上げたいと思います。また、各地協における献身的な活動に対して、地方JAM、あるいはJAM本部がきめ細かな対応ができていないのではないか？といった課題も浮き彫りとなってきました。今、それぞれの総対話アクションで出された意見を精査し、20周年に向けた運動方針に反映すべく、議論を重ねているところであります。

1999年9月9日、JAMが結成され来年20周年を迎えます。結成当初50万人だった組合員は現在35万人に減少しています。15万人の仲間がJAMの下を去っていきました。1993年に確認された「われわれはなぜ統一を進めるのか」には、このように書かれています。

「労働組合の力はより多くの組合員の団結と連帯にある。」JAMが理想とする中小労働運動を更に推進するためにはより多くの仲間の結集が必要です。300人未満の中小企業は全体の99%に上り、そこで働く労働者は70%占めます。しかし、100人未満の中小企業で働く仲間の組織率は1%に満たないのが現実です。昨年の大会で中小労働運動を連合労働運動のど真ん中に据えると申し上げましたが、そのためにも中小企業労働者の組織化を進めていかなければなりません。

田中ひさやを国会へ

「田中ひさや」を国会に送る戦いは、決して負けることが許されない組織の存亡をかけた戦いです。これまでお話しした組織変革も参議院選挙勝利の先にしか見出すことはできません。9月からはギヤを一段上げ、アクションゾーンに入っていきます。これまでの戦いの真価が問われます。これから来年7月に向けて、JAMの活動を政策実現に集中して参ります。私たちには35万人の仲間がいます。そして基幹労連27万人の仲間が共に戦っています。この二つの組織が力を合わせれば、確実に30万票を獲得することができます。

さて、これまで様々な議論がありました政党問題について、本大会において議案提起致します。JAMは国民民主党を基軸とし、「田中ひさや」必勝の戦いを進めてまいりたいと思います。国民民主党とはJAMの掲げる「価値を認めあう社会へ」を選挙政策に織り込んでいく協議も進めております。また、豪雨災害においては雇用調整助成金の柔軟な対応について、いち早く国民民主党の森本議員に国会で取り上げていただきました。さらに、働き方改革関連法案の付帯決議には、JAMの考え方が多分に反映されています。国民民主党であれば、必ずやJAMの仲間の声を国政に反映することができるかと確信しておりますので、何卒、ご理解を頂きたいと思えます。

「田中ひさや」を国会に送るためには、「田中ひさや」という個人名を徹底しなければなりません。極めて厳しい戦いではあります。どうかみなさん、もう一声、もう一声の声掛け運動をお願い申し上げます。